大友宗麟と臼杵・津久見・佐伯

増村隆也

(一) 大友義鎮（宗麟）と佐伯惟教宗天

天文十九年（一五五〇）二月十二日豊後の守護であった大友義鑑が、その家臣津久見美作守と田口新蔵人の為に傷つけられ十三日に死亡した一大事変があった。この時大友義鎮（宗麟）は別府の温泉に湯治に行つていて留守で別府でこの事変を聞き急いで府内（大分）に帰って行く時、何と言ってもこの反乱軍を鎮定するには兵が必要な時である。この時この義鎮の帰途を兵を率いて立石に迎えたのが佐伯栂牟礼城主佐伯惟教宗天であった。

義鎮は惟教を軍の先鋒として府内（大分）の館に帰ることが出来、父義鑑の遺言によって大友の家督を継ぎ、豊後の国の守護となった。即ち大友宗麟が大友氏を継ぐ第一日から佐伯惟教宗天が宗麟に忠勤を励んだ訳であった。義鎮はこれが為佐伯惟教を重く用いた訳であつた。

惟教はその後幾多の戦に義鎮の軍の先鋒となって仂いた事は勿論であるが、これが為大友の一族老臣等の妬みをかい、又佐伯氏は大神氏の名門であったがこの佐伯氏の名門を嫉むのあまり、事をかまえて義鎮に讒言し、遂に惟教宗天は城を捨てて伊予の国に去らねばならなかった。

しかしこの伊予の国に渡ってから十二年目の永禄十一年十月毛利元就が中国十六ケ国の兵を率いて筑前の立花城を攻撃中であると聞いた惟教宗天は、日頃宗麟を怨んでいたがその怨みを捨て豊後に渡り、義鎮に一戦の功なかるべからずと、弘治三年より十三年目の永禄十二年（一五六九）の三月豊後の佐賀の関におし渡り、筑前に出陣中の大友義鎮にこの事を知らせ、義鎮（

宗麟）はこれを非常に喜び、勇士の本領は斯くこそあるべしと、早速佐賀の関に新城を造らせ、船手の押えを命じた程であった。

その後元亀三年（一五七二）四月に伊予宇和郡の領主西園寺公広と宗麟の娘の婿であった一条康政が戦った時、宗麟はその援兵を四国に送る時これを佐伯惟教宗天等に命じた。惟教宗天等は佐伯、佐賀の関、佐志生、一尺屋等で船出の準備をし、四国に遠征して勝利を得たのであった。

(二) 宗麟丹生島城に移る

大友宗麟が臼杵の丹生島城（今の臼杵公園）を築いたのは永禄五年（一五六二）三十三才の時であった。この臼杵の城に移った原因に就ては永禄四年（一五六一）十月十日と十月二十六日の二回、中国地方の毛利元就と門司に戦って利なく可成の打撃を受け、十一月十日遂に総退却をし、毛利の軍の追撃に会って豊前の中津郡国分寺原に大敗し、蓬々の態で豊後の国に帰ったのであった。この時毛利元就が更に追撃して来たとすれば、大友氏は府内（大分）に居館があっただけで、城は築いていなかったから、ひとたまりもなく占領されていた事であろう。この為大友宗麟は急に城を築く必要があった。宗麟が城を築いたのは現在の臼杵公園即ち丹生島城であった。

この城は現在と違って四面海であり、敵を防ぐには最も適した要害の地であった。どうしてかと言うと城の囲りは巍然として削るが如くなっており、石垣を築かずとも堀や池を堀らずとも堅い天然の要害であったからである。

(三) 宗麟と仏教

大友宗麟が臼杵に移った頃は未だ切支丹の信者ではなかった。寧ろ熱心な仏教信者であって、その当時豊後にいた徹岫国師から禅の話を聞き、この徹岫国師の為に京都の紫野大徳寺内に瑞峯寺を建て、又臼杵の諏訪山に寿林寺を建て、紫野大徳寺の

怡雲和尚を招いて開山とし、永禄五年（一五六二）怡雲和尚から戒を受け、出家して休庵宗麟居士と言い、更に紫野瑞峯寺の瑞峯をとって自分の戒名とした。又怡雲和尚が二年ばかりして臼杵から京都に帰っていたのを再び臼杵に招いて文珠寺を建てて居らした程である。

又佐伯市中央区潮谷寺の記録には永禄中宗麟の建立となっている事から考えて、潮谷寺も又宗麟の建立と思われる。更に永禄七年（一五六四）七月宗麟の夫人が死ぬると、宗麟は夫人の菩提の為に臼杵に宝岸寺を建て、又臼杵に来ていた祐範上人の為に現在の臼杵の大橋寺を建立した。即ち大友宗麟は真面目な熱心な仏教信者であった事が伺われる。

大友宗麟の建立した京都紫野大徳寺瑞峯寺には、大友家の古い墳墓が数基あり、又同寺には大友宗麟の肖像画が保存されていた。この肖像画はすでに古く、今は帝室博物館に保管され、同寺に保管されているのはその模写である。この肖像画を見ると、大友宗麟は武田信玄の像の如く袈裟をかけた出家の姿であって、大徳寺の和尚の賛が書かれている。

(四) 県南地方と切支丹

豊後の国の切支丹は、天文八年（一五三九）ポルトガルの船が府内浦に来て大友義鎮（後の宗麟）に鉄砲を献納し、天主教をといたのに始まるが、臼杵ではそれより十七年後の弘治二年（一五五六）ポルトガルの商人が府内に病院を建て、次で臼杵にも病院を建てたのが始まりであるとされているが、年代ははっきりしていない。

大友宗麟が海外貿易をして切支丹を保護した為に臼杵の城に往来する宣教師も非常に多く、その関係から永禄八年（一五六五）臼杵に天主堂が建てられた。

元亀元年（一五七〇）カブラルが豊後に来てから豊後の切支丹が非常に盛んになり、宗麟の次男が天正三年（一五七五）洗礼を臼杵で受けてから後は、大友の一族及びその家臣で洗礼を受ける者が相次ぎ、その数も五十余名に昇った。

しかしこのカブラルも宗麟を切支丹信者にする事は出来なかった。宗麟は切支丹の洗礼を受け信者になったのは後の事で、

宗麟は当時大々的な鹿狩を佐伯で行っている。

(五) 大友宗麟の鹿狩

天正二年（一五七四）の春宗麟は佐伯の栂牟礼城主佐伯惟教に佐伯の大入島、彦岳の麓の芝山、釜戸崎で鹿狩を催す準備せよと命令して来た。この三ケ所は宗麟の狩獵場であって、他の者は一切狩をする事を禁じられていた所であった。命を受けた惟教は、佐伯の宮内に多くの家を建て準備をした。宗麟は天正二年四月十五日長子義統を始めその一門、国中の諸大名を悉くめし連れ、その他京都から来ていた天下の名人と言われた役者等をともなって佐伯に来た。

その前夜祭は豪華なものであった。第一日の四月十六日大入島の鹿狩りで約五十頭、十七日彦岳の麓の芝山では二百三頭、その中三十頭は生け捕り、十八日釜戸崎では四百八十頭、ついで栂牟礼の城山で八十三頭を捕った。

天正三年（一五七五）の秋津久見山で鹿狩をした時は、鹿笛の名人であった佐伯床木の者を召し出し、宗麟の後ろから鹿笛を吹かせた。鹿笛を吹くと鹿は笛の方に集って来た。宗麟はこの名人の合図によってよく鹿をうった。又天正五年（一五七七）四月津久見山で狩をした時は、惟教の家来は仁田四郎忠常の如く傷ついて荒れ狂う大鹿にまたがり、遂にこれを生捕りにした。如何に鹿が佐伯地方に多かったかが判る。

(六) 臼杵城内の宗麟

大友宗麟が臼杵の城に住んだ時は前述の如く三十三才であり、臼杵で海外貿易をした為に、臼杵の町は非常に栄えた。又大友氏の勢力は他国に及び、諸国を征服して一大王国を作っていた為に、その強大さは室町将軍も恐れをなした程である。

この豊後の国の当時の強大さが、如何にヨーロッパ人の目に写っていたかは、別府の日名子氏が洋行中、パリで手に入れた一五九五年（文禄四年）ドイツ系フランドルの地理学者オルテリウスの作った日本地図によって明らかである。この地図を見

ると九州全部が豊後の国と書いてある事から知られ、現在の大分県下では地名として臼杵只一つが記載されている。これは言う迄もなく、大友宗麟が臼杵を居城としていたからであろう。

即ち国は富み、兵は強いと言う関係で大友宗麟は無事になれ、兵を練るとか国政を摂る事を怠り、酒色に溺れ、忠篤の士を遠ざける様になり、昼夜の別なく城中に酒宴を張り、領内を廻って二十才前後の美人はかたっぱしから城中に連れ帰り、為に臼杵城内の美人は数知れず、宗麟は好色の限りを盡くしたのであった、この為家庭の不和も当然起った。

大友宗麟が切支丹信者にならなかったのは、多妻主義を切支丹が禁じた為とされているが、遂にこの宗麟も天正六年（一五七八）には切支丹の洗礼を受けた。これは宗麟が切支丹の教えを聞いて二十七年目であった。

宗麟が信者となってからは、臼杵の城内にたちまち天主堂が建ち、市内にノートルダム寺院が建立された。この反面領内の寺院は圧迫を受け、領内の寺は或は壊され、或は焼かれたものが少なくなかった。

津久見の三寺と赤八幡の焼かれたのは天正十年（一五八二）であった。即ち仏教信者であった宗麟が、一度切支丹信者となると、今迄信じていた仏教を徹底的に憎むという態度であった。

この宗麟の炎えるが如き切支丹熱は、遂にローマ法王に使節を送る事になった。これは我国からヨーロッパに送られた使節の第一号と言うわけであるが、この使節は臼杵の城から派遣されたわけである。

天正六年三月日向に宗麟が出兵していたが、宗麟が洗礼を受けて僅か二ケ月後の天正六年十月には、日向の土々呂附近に切支丹都市を計画中であった。

この切支丹都市に新しい城が出来上ると宗麟は、宗麟の夫人を始め、洗礼を受けた一族の者、及び宣教師を連れて日向の新城に移り、益々切支丹都市の発展が予期されたのであったが、同年十一月十二日耳川に薩摩の大軍と会戦して大いに破れ、蓬々の態で臼杵の城に逃げ帰ったのであった。

この耳川の戦から宗麟の威勢は地に落ち、宗麟に反する者が多くなった、即ち宗麟が臼杵で海外貿易をやり、ノートルダム

寺院等を造り、数国を平定し、国は富み、大友王国を誇った時が宗麟の全盛時代と言うべきであろう。

(七) 宗麟と津久見

大友宗麟は長男義統に国を譲って津久見に隠居した。これについて日本西教史には、宗麟（法名フランシスコ）は焼け死んだ予言者の様に熱心に切支丹を信仰し、仏教の最も盛んに行われる津久見を隠居の地と選んだ。

この津久見は仏教の寺院だけがあり、国内のあちこちに切支丹の盛んに行われた時でも、津久見には切支丹は全く行われなかった。然し宗麟は宣教師と共に津久見に行き、仏教徒を悉く追放し、昔からの仏教を後をとどめない様にする為にその寺を焼き、又仏像をも焼いた。こうして津久見の住民二千人を強制的に改宗させたのだと書いてある。

この津久見は昔から仏教の堅塁で切支丹の歯の立たない所であったが、宗麟が直々乗り込んで無理矢理に切支丹にすべく、宗麟が腰をおろした訳であった。

宗麟が津久見に移ったのは天正九年（一五八一）だと津久見市解脱寺の年代帳に書いてあるが、この年代帳を書いた時代が新しく、これにより宗麟が天正九年に津久見に移った事に間違いないと確認する訳にはいかないが、大体その頃であったと思われる。その後宗麟は再び国政を摂る事になり、臼杵の城に帰って豊前、豊後、筑後を平定した後は再び宣教師と共に津久見に帰って、法悦にひたり余生を送った訳であった。

津久見の彦の内のクリ芝、津久見の下青江井弁田のクリスバは、共に切支丹の遺蹟と思われる。クリ芝もクリスバも十字架の建っていた所で、信者が集って礼拝した所と思われる。

(八) 臼杵の戦と宗麟の死

天正十四年（一五八六）十月島津の軍は豊後の国に侵入し、遂に府内（大分）に入り、同年十二月上旬には宗麟の居る臼杵

の城（丹生島城）に兵を進めて来た。

この時宗麟は南蛮から買い求めていた大砲「国崩」を発砲し、島津の軍を撃退した。これは我国が、大砲で戦争した始めのものと思われる。この臼杵の戦は勝敗は決しなかったが、この「国崩」の為に島津も軍を引いたものと考えられる。

この他天正十四年十二月佐伯では佐伯栂牟礼城主佐伯惟定が、堅田の野に島津の軍と会戦して殆んどこれを壊滅させ、又同年十一月津久見の四浦の久保泊の城では薩摩の軍船二百艘の攻撃を大砲で撃破し、又同年十二月佐伯の因尾では薩摩の兵百余人を不意討して、これを全滅に等しい打撃を与えた等の戦さがあり、丹生島城に居た宗麟から各々感状が与えられたのであった。しかし臼杵の戦で宗麟が長年に亘って造つたノビシヤド、カサ・ブロフエツサ、会堂、病院等はかたっぱしから敵の兵火にかかって、さすがの切支丹の牙城も一瞬にして灰燼に帰した訳であったが、これが原因になったのか、その翌年天正十五年（一五八七）五月二十二日大友宗麟は津久見に死したのであった。

その臨終及び葬式の模様を、日本西教史には次の様に書いてある。

大村純忠が死んでから十八日目に上帝（神）は宗麟を召した。この宗麟は薩摩の兵に領地を奪われ、キリストの寺を焼かれ十字架を壊されたのを非常に悲しみ、これが為に病にかかり、非常な高熱で遂に死した。死に臨み、共に津久見に来ていた宣教師を呼んで聖礼を受け、その病中は神の事より外に話す事を嫌がり、この世の事は総て望みを絶っていた。宗麟は切支丹を信じ、領民にも切支丹に服従せしめた事によって、沢山の人は葬儀に集まり、又豊後の国その他の国々の切支丹信者である諸侯諸士は、皆津久見に来て葬儀に立ち会った。

その屍はキリストの礼服を着せられ、華麗な葬儀が行われた。その柩は近親者に担がれ、大友の大臣達は十字形の旗を持って柩を囲み、大臣に続いて夫人（ジュリア）が宗麟の先妻の子供達と共に進んだ。この子女等は皆喪服に緋の袴をつけていた。兵隊はこの葬列を警備し、沢山の住民はこの宗麟の死を父の死の如く悲しみ、この行列に加った。

柩は切支丹の寺院の中に運ばれ、高い台の上に乗せられ、沢山の燈火がともされ、宣教師等が礼拝して、次いで日本の切

支丹の人々も礼拝したと書かれている。

宗麟は五十八才であった。その葬式は勿論上記の通り切支丹式で盛大に行われ、墓も切支丹式のものであった事は争うべくもない。

宗麟の死の直後天正十五年六月豊臣秀吉は九州征伐の帰途、博多で突然切支丹禁教令を出した。宗麟の嫡子義統は、天正十五年三月切支丹の洗礼を受けたばかりであったが、切支丹を改宗しなければ豊後の国を没収される事を聞いて非常にこれを恐れ、速かに切支丹を捨て、領内の切支丹に圧迫を加え、伴天連十五名を府内（大分）から追放し、その内二名の伴天連は、宗麟の未亡人ジュリアの住む津久見に逃げた程であった。

こうして大友宗麟の百ケ日は切支丹式でやる事が出来ず、府内（大分）の大智寺で仏式によって行ったと言う程の慌て方であった。

大友史料には、宗麟の葬儀は天主教の儀礼によって赤河内の岡に葬り、碑石もその式によって営まれたが、長子義統は一杯の土未だ乾かざる時、仏僧をしてこれを改め、前の天主教式の碑石を壊して仏式のものにしたと書いてある。

(九) 宗麟の墓石に就て

現在大友宗麟の墓は津久見市中田区の引地にある。この墓碑は大友史料によると、寛政年間臼杵の旧族臼杵城豊が、宗麟の墓の荒廃し、墓碑のない事を嘆いて、自費を投じて津久見村彦の内字「ミウチ」に改葬して墓碑を新調したと書いてある。

宗麟が死んだのは天正十五年五月であるから、臼杵城豊が墓碑を新調したのは宗麟が死んでから二百年以上後の事であり、この墓が現在の墓である。即ち宗麟の長子義統が作ったものは現在の墓でない事は勿論である。

大分県郷土史年表によると、ヨセフ師が宗麟の墓地に天主堂を建てた事が書いてある、現在ある宗麟の墓の近く一段と高い所に天徳寺跡と言う所がある、これがヨセフ師の建てた天主堂の遺跡ではあるまいか。

この天徳寺と言うのは、寺の名前からして切支丹式である、即ち仏式に言えば仏徳寺と言うべきで、天徳とは即ち天の徳、言いかえれば神の徳と言う意味である。

佐伯の上堅田長谷に現在、天徳寺と言う大きな禅寺がある、この天徳寺は、昔津久見から移された切支丹寺であると言う口碑がある。

この寺には昔から面白い奇習がある。それはこの天徳寺で法要を営むとか、又は何か行事を行うと、大分県南海部郡蒲江町（旧上入津村）尾浦にある檀家二十五戸から必ず魚を寺に届け、現在でも届けている事で、仏式なら勿論寺の法要、行事の時に魚を寺に届ける筈がない。勿論切支丹寺であった証拠と言う外はあるまい。

㈩ 天徳寺の宗麟の墓

天徳寺の本堂の右横に薬師堂があり、薬師堂の裏に歴代和尚の墓が桧林の中に二列に並んでいる。その突き当りの正面に大友宗麟の墓と言い伝えられている墓がある。

この墓は一風変った墓であって、墓の台は幾つかの安山岩で石垣様に造られ、高さ四十糎、巾約百二十三糎四方の台である。その上に斗桝形の石が置かれている。この斗桝形の石は正確に言うと、高さ二十五糎、巾三十五糎四方のもので、安山岩であり、その上に型の如く仏僧の墓に使われる円筒状の墓石が置かれている。問題はこの斗桝形の石である。斗桝形の石の前面に何かが刻んであり、上に乗せられている円筒状の墓碑を動かしてみると、そこにも何かが刻んであり、後面にも何ものかが刻んである。

その刻んであるものを誰も判読し得るものがなかった。或る者はそれをポルトガル文字だと言い、或る者は切支丹墓独得の記号だと言っていた。その斗桝石の上に乗っている円筒状の石には、只「寂静」の字が刻んでいるに過ぎない。しかしこの円筒状の墓碑も、普通に見る僧侶の円筒状の墓と一寸趣を異にしている。

筆者はそのポルトガル文字と言うその文字を研究してみた。これを拓本に取ってみるとこれは仏教で使う梵字であって、前面の文字は梵字のキルク（阿弥陀）と読む字であり、上面の文字はアーク（大日如来）、後面の文字はウン（アシユク）の文字である事がわかった。著者が読む迄は誰もそれを読めなかったのは、この梵字の書かれた石が右方に横倒しに置いてあったからであると思われる。

天徳寺の老僧の話によると、大友氏が豊後の国から除国された時、豊後に残った家臣は津久見に残った宗麟の墓があばかれる事を恐れた。平家は源氏に追われて都を落ちる時、平重盛の墓のあばかれる事を恐れて、その遺骨を奉じて西国に下った。宗麟の家来も、宗麟の墓をそのまま津久見に置いておく事は出来なかった。

宗麟の近侍で山田某、小野某等七人が宗麟の墓石と、宗麟の生前愛蔵した仏像一体を、密かに暗夜にまぎれていずれかに持ち去った。彼等七人が落ちて行った所は、佐伯の長谷の現在天徳寺のある台地であった。ここは人家にも遠い山中の密林におおわれた台地である。ここに宗麟の墓を安置し、仏像は別に庵を造ってまつり、宗麟の墓を守った。

慶長五年（一六〇〇）毛利高政が佐伯藩主となり、現在の城山（鶴屋城）を築いた時、毛利高政は新城から一里もないこの台地に彼等大友の浪人七人の者が集団生活をしているのを許さず退去を命じ、津崎等は鶴見村（旧中浦村）鮪浦に移し、山田、小野等を蒲江町尾浦（旧上入津村）に移住せしめた、これが現在尾浦二十五戸の天徳寺の檀家である。

(十) 天徳寺の姓と宗麟

この天徳寺と言うのは島津の軍が豊後の国に侵入して来る直前、島津に連戦連敗した大友宗麟が天正十四年（一五八六）三月豊臣秀吉に直接あって秀吉の援兵を受け、島津の大軍を滅ぼさねばならないと考えて臼杵の城から乗船し大阪に行く時、大友宗麟は天徳寺左ェ門入道と変名した。又そのお供をした柴田久三統勝にも、この天徳寺の姓を許したのであった。為に大友宗麟は天徳寺宗麟の名前となり、従者の柴田統勝は天徳寺統勝と変名した訳であった。

何ゆえに宗麟が姓を天徳寺と変えたかに就ては微行と言う意味は勿論であるが、大友文書録にはこの宗麟の大阪行きが、その長子義統の使いに甚だ似ていると言う所から、父である大友宗麟が大友の姓を使わずに、わざと天徳寺の姓を用いたのであろうかと記している。この従者天徳寺統勝が天徳寺の姓を許された関係から、統勝の父柴田礼能にも天徳寺の姓を許し、天徳寺礼能と称した。

この礼能父子は天正十四年十二月島津が臼杵に攻め寄せた時、共に戦死した勇士である。

(十二) 天徳寺に於ける宗麟の墓に就て

天徳寺では前述斗桝石の墓を宗麟の墓と言ってる同時に、又これを開山の墓と言っている。そうすれば宗麟がこの寺の開山と同一人でなければならない。

豊後国志によると、中興開山章庵が宗麟と同じ天正十五年の死亡となっている。何かそこに宗麟と切り離す事が出来ないものがあり、又同時にそれを同一人であると口外し得ない上記の理由がある事を考えねばならない。宗麟は休庵とも号した。この休庵（宗麟）の墓である事をカムフラージュする為に章庵の墓としたのではなかったか。

これは勿論その墓のあばかれる事を恐れたが為であったと思われる。

この天徳寺にあるこの梵字の書かれた墓は、長子義統が切支丹式の墓を改めて仏式のものとしたその墓碑であると思われ、切支丹式の斗桝形に墓碑を作り、仏教の梵字を刻んだと言う所に苦心の跡が見られるではないか。

（昭和三十三年四月八日天皇皇后両陛下大分県御巡幸の日、柊林堂にて記す。）